

Qaradawi . : in. 》Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte 《 p.29－52

宮崎 裕助

Yusuke MIYAZAKI

(単著) 論文 Responsibility of Making Decisions without Decisionism : from Carl Schmitt to Jacques Derrida . : in. 》Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte 《 p.140－155

## 〈声〉とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

### 1. プロジェクト概略

身体的な〈声〉の持っている影響力・役割機能を根本から問い直す試みが、現在、さまざまな研究分野においてなされている。ディスクール理論とナラトロジー、発話行為論、テキスト生成論、演劇論、映像論、メディア論、司法論など、〈声〉にアプローチする角度は多岐にわたる。ところで、そこには「言表」「主体」「身体」というタームが分かちがたく絡み合っており、理論的なアプローチによって絡めとることのできない問題が多い。それを丹念に拾い集め、追究し、むしろそれらの問題の所在をあまねく照らし出すことが重要であり、そこに本研究プロジェクトの特色がある。

本プロジェクトは、日本古典文学、ロシア文学、フランス文学、イギリス文学、アメリカ文学、演劇論、映像論とそれぞれ専門分野を異にする研究者からなり、「声とテキスト論」という共通のテーマの下、〈声〉の視点から、さまざまな研究分野の問題を考究し、相互に比較・検討した上で、この視点からのアプローチの有効性を検証し、新たに、総合的かつ多面的なテキスト論の構築を

目指している。2005年以降、本プロジェクト「声とテキスト論」とボルドー第3大学の研究グループ「モデルニテ」との間で、共同研究の基盤が形成され、その研究成果は、国際シンポジウム、講演会等で公開されている。

## 2. 参加メンバー（平成23年4月現在）

先	田	進
鈴	木	孝庸
廣	部	俊也
藤	石	貴代
佐々	木	充
金	山	亮太
高	橋	康浩
村	上	吉男
平	野	幸彦
斎	藤	陽一
番	場	俊
橋	谷	英子
鈴	木	正美
逸	見	龍生
高	木	裕

## 3. プロジェクトの進捗状況

### 1 講演会

- (1) 講演会 ナント大学特別講演 *La Voix et l'écriture dans la poésie de Nerval* 「ネルヴァルの詩における〈声〉とエクリチュール」講演者：高木 裕

日時 平成22年9月22日（水）

場所 ナント大学文学部講演室

ナント大学の特別講演（招待）において、研究代表の高木は「ネルヴァ

ルの詩における〈声〉とエクリチュール」と題した講演を行った。フランス近代詩の韻文定型の形式をとりあげ、韻文定型のエクリチュールにおける〈声〉の役割を再検討したものである。ネルヴァルの傑作『幻想詩篇』の萌芽を示す1841年の「デュメニール草稿詩篇」における〈声〉の問題をそのエクリチュール（書記化）の問題と関係づけ、韻文詩篇の〈声〉から言語表現に到るまでの過程に「もう一つの〈声〉」が生成している」と指摘した。

(2) 講演会 大黒俊二氏講演会

日時 平成22年11月18日（月）

場所 総合教育研究棟B棟プレゼンルーム

基盤研究（B）「声とモデルニテに関する比較総合的研究」との共催で、2010年11月に、岩波書店の「ヨーロッパ中世シリーズ」で、『声と文字』を上梓された大黒俊二先生（大阪市立大学院教授）の講演会（演題：「女性のリテラシー，俗語のリテラシー — 15世紀のフィレンツェから」）を開催した。中世ヨーロッパを舞台に展開する〈声〉の文化と文字の文化の相克について、当時の女性を書いた手紙文を資料に、わかりやすく解説された。〈声〉の文化から文字の文化への移行は、決して直線的なものではなく、相互に影響の跡を留めながら、それぞれが相補的な役割を果たしてきたことが確認できた。

(3) 講演会 「〈声〉の破片—アンリ・ミショー『アジアの一野蛮人』あるいは自己自身への抗いとしての旅」講演者：ジェローム・ロジェ（ボルドー第3大学）

日時 平成22年12月10日（金）

場所 総合教育研究棟大会議室

ボルドー第3大学の研究プロジェクト「モデルニテ」と人文学部の研究プロジェクト「〈声〉とテキスト論」とは、2005年以来、研究交流を続けており、今回もボルドー第3大学の同プロジェクトから、ミショー研究の第一人者で、ガリマール書店から、『エクアドル』『アジアにおける一野蛮人』の注釈書を上梓されている、ジェローム・ロジェ特別研究員

を新潟大学に招き、「〈声〉の破片—アンリ・ミショー『アジアの一野蛮人』あるいは自己自身への抗いとしての旅」と題した講演会を開催した。ミショー文学の初期の傑作『アジアの一野蛮人』は、ミショーの日本を含めたアジア旅行を題材に、ヨーロッパ人の耳に入ってくる異邦の〈声〉の特質を感覚的に言語化している。講演では『アジアの一野蛮人』の特異な語り口、饒舌で多声的な語り口には、詩人の自己同一性に関する不安な意識が反映されていることが明快に語られた。

(4) 講演会 姜信子『ノレ・ノスタルギーヤ』

日時 平成23年3月21日（月）

場所 新潟大学駅南キャンパスときめいと講義室A

在日朝鮮人3世の作家姜信子を講師に講演会を開催した。東日本大震災後間もない時期に開催された講演会であったが、言葉にできない体験をいかに語るのか、という重いテーマとなった。姜信子は、スターリンによって極東から中央アジアに追放された朝鮮民族、高麗人を訪ねる旅を続けているが、強制移住や紛争などによって、理不尽な暴力に晒された人々が、「語り得ぬ」ものを抱え、言葉、声を失う体験について語る。声にならない声、言葉にならない言葉について深く思いをめぐらし、この体験につながってゆくことが重要だと指摘した。声にして語り得ぬもの、言葉にして書きとどめられないこと、そのような事象、経験にわれわれはいかに向き合えばよいのかという問いかけが根底にある。安易に答えられない問題であるが、追放された高麗人の子孫の人たちが歌い継いでいる「歌」の映像が何度か流れたときに、「歌」の役割について再考する必要を感じた。

2 「声と身体」をめぐる学問と芸術のコラボレーション

(1) 多和田葉子&高瀬アキ公演会「まっかなおひるね」声とピアノのコラボレーション

日時 平成22年11月29日（月）

場所 総合教育研究棟E260

〈声〉の問題に実践的にアプローチし、身体的な体験を通して、この問題の所在を照らし出してくれるのは、〈声〉のパフォーマンスに精通している芸術家（演劇人、作家、詩人、オペラ歌手、等々）である。今回は、平成22年11月に、作家の多和田葉子氏をお招きし、公演会を開催し、声とテキストの関係を再考する機会とした。公演は、作家の多和田葉子による作品朗読とピアニストの高瀬アキによる演奏のコラボレーションであった。単に「読む」だけの朗読ではなく、声の持つ力を最大限に生かし、多和田独特の言語実験に満ちたテキストを変幻自在に「演じる」パフォーマンスである。高瀬アキとはあらかじめ全体の構成を決めてあるが、実際のパフォーマンスにあたっては、基本構成を保ちながらも声と音との即興的対話を重視し、きわめて劇的な音空間を創造した。声と音とが絡み合い、擦れ合い、捻じれ合い、離れ、結ばれ、見えない音が視覚的に空間を飛び交うようなイメージを喚起した。まさに、身体を通して、声と音が不思議な共鳴を呼び起こし、新たな想像力を生み出している。この公演によって、身体としての〈声〉の根源的な力を体験することができた。

### 3 成果の発信

#### (1) 論文

鈴木正美 「音楽産業下のロシア・ジャズ」ユーラシア研究, 42号, 2010, 3-7頁

佐々木 充, *A Modern Voice in Ancient Times?*, *Voix et Modernités* (Faculté des Sciences Humaines de l' Université de Niigata), 2011, 11-22頁

高木 裕, *La voix et le sujet lyrique chez Nerval*, *Voix et Modernités* (Faculté des Sciences Humaines de l' Université de Niigata) 2011, 23-34頁

鈴木孝庸, *Imaging 'Ima-yo' from Hei-kyoku*, *Voix et Modernités* (Faculté des Sciences Humaines de l' Université de Niigata) 2011, 157-163頁

番場 俊, *Modernity and the Condition of Voices in Dostoevsky*, *Voix et Modernités* (Faculté des Sciences Humaines de l' Université de Niigata), 2011,

109-118頁

逸見 龍生, *La pluralité des voix dans l'Encyclopédie, Voix et Modernités* (Faculté des Sciences Humaines de l'Université de Niigata) 2011, 93-108頁

逸見 龍生 (翻訳), ドミニク・ラバテ「声の分割=分有 —人称的なものと非人称的なもの—」, 新潟大学人文科学研究128輯, 2011, 25-32頁

鈴木孝庸, 「源平闘諍録の曲節指示とおぼしき注記について」, 新潟大学国語国文学会誌, 2010, 54-65頁

鈴木孝庸, 「平曲譜本としての特色」, DVD版 尾崎家本 平家正節 解説書 (荻野検校顕彰会編), 2011, 5-11頁

鈴木孝庸, 「中院本平家物語の句切り点について」, 『校訂 中院本平家物語 (下)』 (三弥井書店刊), 201, 387-397頁

鈴木孝庸, 「声の伝承・声の記号化 —『平家吟譜』から『平家正節』へ—」, 新潟大学人文科学研究 128輯, 2011, 1-19頁

高橋 正平, 「スパーストウの火薬陰謀事件説教とピューリタン革命」, 新潟大学人文科学研究128輯, 2011, 5-23頁

(2) 招待講演

高木 裕, *La voix et l'écriture dans la poésie de Nerval*, 2010年9月22日, フランス・ナント大学文学部講演会場

(3) 図書

高木 裕 編, *Voix et Modernités*, 新潟大学人文学部発行, 2011, 163頁

金山 亮太, 『サヴォイ・オペラへの招待—サムライ, ゲイシャを生んだもの—』 新潟日報事業社, 2010, 70頁

金山 亮太, 井野瀬久美, 『イギリス文化史「なぜイギリス人はサヴォイ・オペラが好きなのか」』 昭和堂, 2010, 339頁

金山 亮太, 松岡光治, 『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前期の社会と文化「メアリ・スミスは何を見たのか」』, 溪水社, 2011, 230頁

橋谷 英子, 『浙江省舟山の人形芝居』, 風響社, 2011年 529頁